

た。今その長男も高校教師となり、そこに私が安住しているところである。

妻子は生死不明、私はシベリアへ

岐阜県 古 関 民 夫

父親の猛烈な大反対を押し切って、昭和十八年五月、大陸で思う存分に活躍しようと、目的の開拓団へと向かいました。関釜連絡船で釜山から満州ハルビンへ地図を頼りにハルピン駅より牡丹江駅行きの列車で一面坡駅で下車、徒歩で通河県庁を目ざして歩きつづけ、夜は星の方角を確かめながら、見渡すかぎり原野。五月とはいえ満州はまだ寒く、歩きつづけて三日目で現地の人の部落に助けを求め、手話で事情を説明し、了解してくれた。粟のおかゆをご馳走になり、その時のおかゆのうまさは今でも忘れない。

部落の人びとは皆あたたかく親切であった。ここで一泊して、朝早くから馬車でなお北へと向かって行く。

突然川幅の広い大きな川岸に着き、ここで小船で、川の向う側が、通河県県庁とのこと、ここまで、無料で送り届けてくれた。大きな川は、松花江であった。

まず県庁へ行き、満州国三江省通河県大古洞開拓団入植の書類を見て、役所の人びとが、よく一人で来られた、こんなことは初めてだ、と言って喜んでくれた。県庁では、今日は一泊して明日は隣の小古洞開拓団の船がくるから、それに乗船して行くようにと親切に説明をした。

小古洞港の一つ手前の清河鎮港で下車し、近くに日本人経営の郵便局と大古洞開拓団案内所があり、ここで日本を出発して以来いろいろな難儀をしてようやく到着したことを話した。

さっそく本部から迎えが来て馬車にゆられながら、約一時間半ぐらいで、本部に到着した。団長を始め、本部の方々が、大勢で大歓迎をしてくれ、思わず嬉し泣きをした。その日は本部で一泊した。

私の行く部落は、約八キロの所で、大古洞開拓団八州部落とのこと、いよいよ今日は八州部落へと向か

う。到着した時は、八州部落の人びとが全員で、大歓迎してくれた。この大陸で、骨を埋めるのだ、と全員の前で挨拶し、誓った。

昭和二十年二月、一旦帰国、大陸の花嫁として妻を迎え、再び渡滿未来の希望をもって第二の故郷をつくるのだ、とあらたな決意をした。

妻は鎌の使い方も知らない。家畜、牛馬等になれないために幾度か泣いて、励まし、だいぶ慣れたころに八月、突然ソ連軍が滿州国に越境侵入してきたと情報が入り、直ちに働き盛りの男は召集され、戦場へとかり出され、これから、口に言えないほどの悲劇が至る所で起きる。八月十五日を境に、部隊は全員戦場から引揚げ、命令された所へ何万人というほどの兵隊が集まっていた。道中至る所に女、子供達の避難する姿。倒れる女、子供を見て、どうすることもできなかった。一方、部落に残っている家族達はどうしているだろうとその安否を気遣う日々が続く。

いよいよ明日はソ連軍によって武装解除され、捕虜となるので、これからのわれわれはどうなるの

か誰にもわからない。

その夜多数の兵が脱走した。私は最後まで部隊と共に行動することに決めた。良し悪しは運に任す。数日後ソ連軍により日本兵はダモイダモイという。日本へ帰るのだ、と喜んでいたら、だまされていることを知らずに貨物列車に乗る。夜中に西へ西へと列車は走る。方角が違うので、だまされたことを知る。どこまで、行くのか、誰も知らない。

十三日目に小さな町で下車する。古い兵舎がわれわれの入る収容所とわかるここに約一年半ぐらいいた。なれない作業をやらされる。長い冬で、氷点下六十度を三度体験し、兵隊は栄養不良で衰弱で毎日のように二、三十人ぐらい亡くなつて行く。私も死の一步手前まで行ったことが二回あり、奇跡的に助かり、戦友達も良く生きて来たと言つて喜び合った。ソ連側から帰国の命令があり、半信半疑だった。長い長い捕虜生活。生きていて良かった、生きる喜びを充分に感じたが、この間に約二千人余り亡くなった。冥福を祈りながら、列車はナホトカを目ざして走る。途中下車させられ、

あの町、この町へと作業しながらナホトカへと着く。

日の丸のついた高砂丸を見た時は本当に泣けた。

二十二年十月二十三日、舞鶴港に上陸後は京都・名古屋・長野県上山田と各国立病院に転送されて、二十三年十月頃に退院し、生まれ故郷へ帰ったが、妻は生死不明で、子供は避難途中で死亡した、と聞き、力が抜けるような気持、自分だけが生きて帰ってきたことに妻達に申しわけない気持で複雑だった。三年、四年と妻の消息不明のために身内から再婚のすすめもあつて、二十八年に現在の妻と再婚し、二人の内孫に恵まれ、幸福に余生を過ごしているが、今だに妻子の生死は不明である。二度と戦争を起こしてはならない。戦争ほど惨酷なことはないと。弱い者が一番、犠牲者となることを後世に伝えたい。

悲惨な五年の永い歳月の想い出

愛知県 橋本克己

昭和十七年、父は、食糧増産、北滿防衛という国策に従い、先祖伝来の故郷を捨て、家族七人を伴い、満州の龍江省甘南県大平山村三合屯東三河郷開拓団に入植した。

零下四十度のきびしい自然環境の中、風土習慣の異なる中、過酷な開拓が始まり、寸暇を惜しんで働きに働いた。ようやく軌道にのりかけ、広大な開墾地・牛・馬・豚等の家畜も増えかけた頃、北滿の地の果てにも、重く戦雲が垂れ始め、父にも召集令状が届き、あわただしく戦場に駆り出されていった。

やがて学校も閉鎖され、笑顔の消えた重苦しい日々が続き、ついに八月十五日無条件降伏の日を迎えた。翌日より地獄絵巻に等しい、苦難の逃避が始まった。弱い開拓農民を不幸のどん底へ引きずりこんでいっ